

# 「明和三年（一七六六）青面金剛像庚申塔」は 「馬頭観音像塔」である可能性が高い

須藤 賢一

はじめに

越谷市三野宮の南西・畑の角地にある小祠（しようち）に二基の石仏が安置されている。片方は、道しるべ付き観音菩薩立像。もう一基は、「明和三年（一七六六）青面金剛像庚申塔」とされてきた。

先行研究

「明和三年（一七六六）青面金剛像庚申塔」に関する先行研究を記す。

①越谷市史編さん室『越谷市金石資料集』（昭和四十四年三月二十五日発行）・一六八頁  
石造物の種類は「庚申塔」。主尊の彫像は「青面金剛」。「日月」「三猿」の陽刻があると記されている。

②加藤幸一「大袋地区の石仏」（平成九・十年度調査／平成二十七年十二月改訂）・九頁、六十二頁

石造物の種類は「庚申塔」。主尊の彫像は「青面金剛」。「日月」「三猿」については記されていない。

以上を踏まえ、先行研究①②で「明和三年（一七六六）青面金剛像庚申塔」とされてきた石造物は、はたして「青面金剛を主尊とした庚申塔」なのかを検証する。

像容と持物

主尊の像容は、顔がひとつで手が六本（一面六臂＝いちめんろっぴ）。持ち物は、左上手に法輪、左下手に弓、右上手に宝棒、右下手に矢。持ち物については、一面六臂の青面金剛像の特徴と共通している。（挿図①）

馬頭

この主尊は、頭に馬頭を戴いているように見える。肝心な部分が劣化していて、馬頭を頭に戴いている、と、断言はできないが、青面金剛の怒髪よりも、馬頭に近いと判断できる。<sup>1</sup>

馬口印

胸前の両手で合掌しているように見えるが、よく確認してみると、合掌ではなく馬口印（※）を結んでいるのがわかる。（挿図③）

（※）馬口印（まこういん）とは、人差し指と薬指を伸ばして中指を折る印相（いんぞう）。「ばこういん」とも呼ばれる。この主尊も中指を折っている。（挿図③の○印）

馬頭観音は、頭に馬頭を戴き、腕の前で馬口印を結んでいるのが大きな特徴だが、この石塔の主尊は、青面金剛よりも馬頭観音の特徴を兼ね備えている。

むすび

この石造物の特徴は次の三点。

①頭に馬頭を戴いているように見える。

②両手で馬口印を結んでいる。

③庚申塔の特徴を示す日月・邪鬼・二鶏・三猿などがみられない。

以上の三点を根拠に、この石塔の主尊は、青面金剛ではなく馬頭観音で、庚申塔ではなく、馬の供養のために建てられた供養塔である可能性が高いと判断する。（挿図④）

【参考文献】

加藤幸一「大袋地区の石仏」（平成九・十年度調査／平成二十七年十二月改訂）（越谷市立図書館所蔵）

越谷市史編さん室編『越谷市金石資料集』越谷市史編さん室（昭和四十四年三月二十五日発行）

庚申懇話会編『日本石仏事典（第二版新装版）』雄山閣（平成七年二月二十日発行）

日本石仏協会編『日本石仏図典』国書刊行会（昭和六十一年八月二十五日発行）

外山晴彦『サライ』編集部編『野仏の見方』小学館（平成十五年六月十日発行）

日本石仏協会編『石仏巡り入門―見方・愉しみ方』大法輪閣（平成九年九月二十五日発行）



挿図② 馬頭像容と持物

【挿図出典】挿図①～④はすべて筆者撮影



挿図① 馬頭観音像塔

【挿図出典】挿図①～④はすべて筆者撮影



挿図④ 馬頭観音像塔

【挿図出典】挿図①～④はすべて筆者撮影



挿図③ 馬口印

【挿図出典】挿図①～④はすべて筆者撮影